

建築家エルンスト・マイ(Ernst May)の 生涯と作品(その1)

お茶の水女子大学名誉教授 田中 辰明

エルンスト・マイ(1886~1970)(図1)は第一次世界大戦と第二次世界大戦とのほざまであるヴァイマル共和国時代にフランクフルト・アム・メイン(Frankfurt/M.)^{註1)}に多くの団地(ジードルング)を手掛けた建築家で都市計画家でもあった。1920年代に12000戸の集合住宅を主にベルリンに作ったブルーノ・タウト^{2), 3), 4), 8)}は1880年生まれであるので、ほぼ同年代の建築家である。国立バウハウスの初代校長となったヴァルター・グロピウス^{5), 6), 7), 8)}は1883年生まれでやはり同年代の建築家である。この3名がドイツ建築界で表現主義を主導し、かつ一般勤労者の為の集合住宅建設に力を入れた代表的建築家と言える。3名ともナチスドイツを逃れ外国へ亡命している事でも共通点がある。マイは1866年7月27日にフランクフルトで皮革製品製造の工場経営者アダム・マイ(Adam May, 1855~1934)の子息として生を受けた。母親はデュッセルドルフ出身でファニー・



図1 エルンスト・マイ¹⁾

クララ・マイ(Fanny Clara May, 1859~1923)と言った。生家はユダヤ人の資産家であった。^{註2)}エルンスト・マイが自ら描いたフランクフルトの両親の家の水彩画が残っている(図2)。祖父が工場の創業者で、市議会の民主勢力の指導者であった。エルンスト・マイはフランクフルトで絵画の教育を受けた後、英国へ渡り1906年から1年間ロンドン大学で建築学を学んだ。1908年にダルムシュタットで兵役を務め、その後ミュンヘン工科大学に入学した。ここでフリードリッヒ・フォン・ティールシュ^{註3)}やテオドール・フィッシャー^{註4)}らドイツヴェルクブンド^{註5)}の主要メンバーの影響を受けた。1910年から再度英国へ渡り、2年間滞在した。この間にレイモンド・アンウイン^{註6)}の社会主義思想に共感し、アンウインのもとで田園都市の計画手法を習得した。その間にアンウインの著書を独訳し、ドイツで出版した。1911~1912年の間ベルリンで建築家オットー・マルヒ(Otto March)^{註7)}の設計事務所で働いている。オットー・マルヒ(1845~1913)は1896/97年に公園付の集合住宅アマリエン公園の集合住宅をベルリンに設計している。1913年にフランクフルトに戻り独立するが、第一次世界大戦が勃発し、再び兵役に就く。フランス西部戦線に召集され、フランスのスケッチを沢山残した。1914年にヘルマ・ボーデヴィツヒ(Helma Bodewig)と結婚している。1917年から建築技師として従軍、フランス、ルーマニアでの戦没者慰霊塔や墓地の設計を行った(図3、写真1)。1919年からブレスラウ^{註8)}の景観行政局に奉職し、ハイナウ、オークラ、クレッテンドルフなどに集合住宅を建設した(図4)。1919年に建築雑誌“シュレジシエス・ハイム”(“Schlesisches Heim: シュレージエンの故郷”)を創刊し、自らの思想の啓蒙を行った。この雑誌は1925年まで発行された。

1918年に妻ヘルマと離婚し、1919年にイルゼ・ハルトマン(Ilse Hartmann)と結婚し、クラウス(Klaus)さらにトマス(Thomas)という子息をもうけた。エルンスト・マイはこの年にドイツヴェルクブンドに入会した。

同じく1921年ブレスラウ都市開発設計競技に参加し、



図2 エルンスト・マイによる水彩画(両親の家)。住所はフランクフルトの Metzgerstraße 34¹⁾



図3 エルンスト・マイが描いたユダヤ人の墓石(Zloczow)1916年¹⁾



写真1 フランクフルトのユダヤ人墓地に眠る第一次世界大戦の無名ユダヤ人兵士の墓(彼らはドイツの為に戦った)(この墓地がエルンスト・マイの設計か否かは不明である)

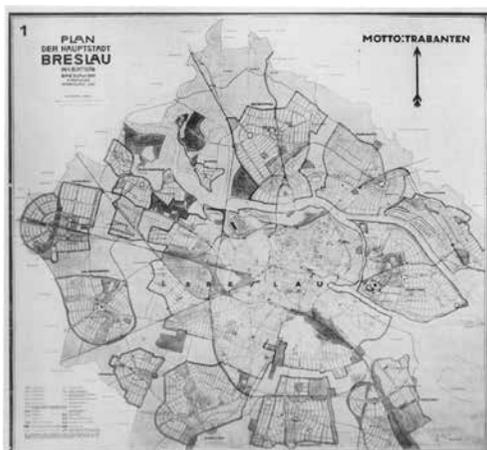


図4 ブレスラウ(Breslaw)の都市計画 1922年¹⁾



写真2 エルンスト・マイがフランクフルトで展開した新フランクフルト計画

衛星都市をベースとした案は優秀賞を獲得した。これがアンウィンによって紹介され名声を得た。

1924年にアムステルダムで開催された都市国際会議に参加し、ここで提案された広域地域計画をブレスラウで実施した。

1925年4月～7月に米国とカナダに旅行し、ニューヨークで開催された国際都市計画会議に出席している。その年の9月1日にフランクフルトに戻り、フランクフルト市で住宅計画の建築家として指名され、同市の建設局長に就任した。当時のフランクフルト市の市長はルードビッヒ・ラントマンで社会主義の政治家であった。エルンスト・マイは「新フランクフルト」(写真2)策定に着手し、都心部の計画は建築家アドルフ・マイヤーに任せ、自らは広域圏・都市拡張案を担当した。また貧困スラム

などの問題を抱える同地で、1930年までに多数の良好な住宅地を供給すべく計画建設していく。^{註9)}

1926年にオーストリアの女性建築家マルガレーテ・シュütte・リホッキー (Margarete Schütte-Lihotky) と共に厨房の近代化を図るべく家事労働の行動を写真撮影分析を試み、これを基に合理的な厨房設計を行った。これをフランクフルター・キュッヘ(Frankfurter Küche: フランクフルトの厨房)と呼び主婦の家事作業の労力削減に寄与した。当時は労働者階級でも女中を置き調理を手伝わせたが、これを主婦一人で調理ができるように考えた。また厨房のユニットを大量生産させ、これがシステムキッチンのはしりとなった。また住宅もプレハブ生産が行なわれるようになった。こういう努力により、住宅が一般労働者の手に届くようになった。またフランク



図5 機関紙“Das Neue Frankfurt”(新しいフランクフルト) 1931年7月号に発表したロシアの新しい町¹⁾

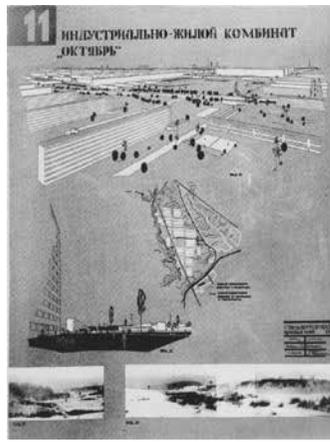


図6 1932年に発表したモスクワの住宅と工場コンビナート¹⁾

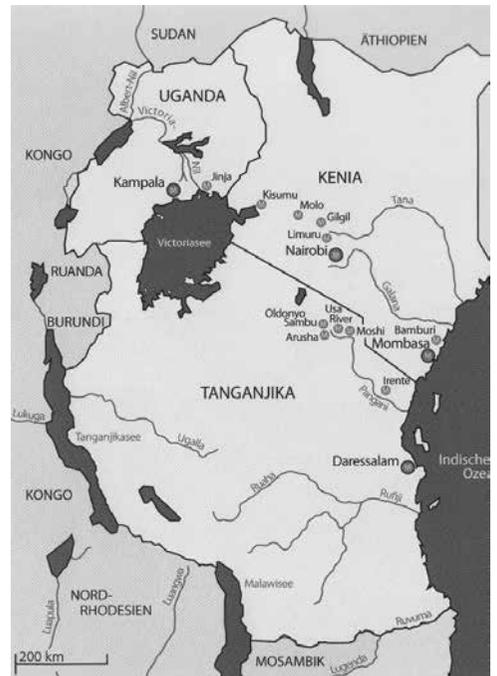


図7 1934年～1954年にマイが行った東アフリカのプロジェクト¹⁾

フルト市の役人として、技術部門の機構改革にも取り組んだ。1926年に建築雑誌ダス・ノイエ・フランクフルト(Das Neue Frankfurt)“新フランクフルト”を定期的に出版した。これによりマイは国際的に認められるようになる。これはブルーノ・タウトがマクデブルグ市の建築の役人として1921年から1922年にかけてフリーリヒト(Frühlicht:曙光)という建築雑誌を発行し、国際的に認められたのを意識しての事と考えられる。1927～1929年にかけてドイツヴェルクブンド展^{註10)}の副委員長としてCIAM^{註11)}計画に参加した。そしてさらに当時のソ連で都市計画に関する講演会に招かれた。

1930年ナチスの台頭により、これを嫌ったエルンスト・マイは建築家ハンス・シュミットらフランクフルト市のスタッフを率いて新天地と考えたソ連へ渡る。これをエルンスト・マイ旅団と呼んだ(図5)。ブルーノ・タウトも1932年にソ連のモスクワへ移動し、重要プロジェクトに参加したが、このプロジェクトは実現せず、1933年にはドイツに戻り、時間をおかずに日本へ亡命している。エルンスト・マイは当初チェコムバーク(中央銀行)、翌年から都市建設委員会に雇用され、1934年までの契約期間に大モスクワ拡張計画、マグニトゴルスクなどの都市の都市計画に参画した(図6)。任期満了後もアカデミズムの活動に参画するが、ドイツとの気候風土の相違に悩むようになる。ドイツではヒトラー率いるナチス党が正当な選挙により1933年に政権を手中に収める。

エルンスト・マイは1934年にはナチス政権を逃れ、英国領の東アフリカにわたり、1952年迄18年間にわたりアフリカに滞在する。当初タンガニーカ(現タンザニア)でしばらく農業に従事した後建築業務を再開した。熱帯の

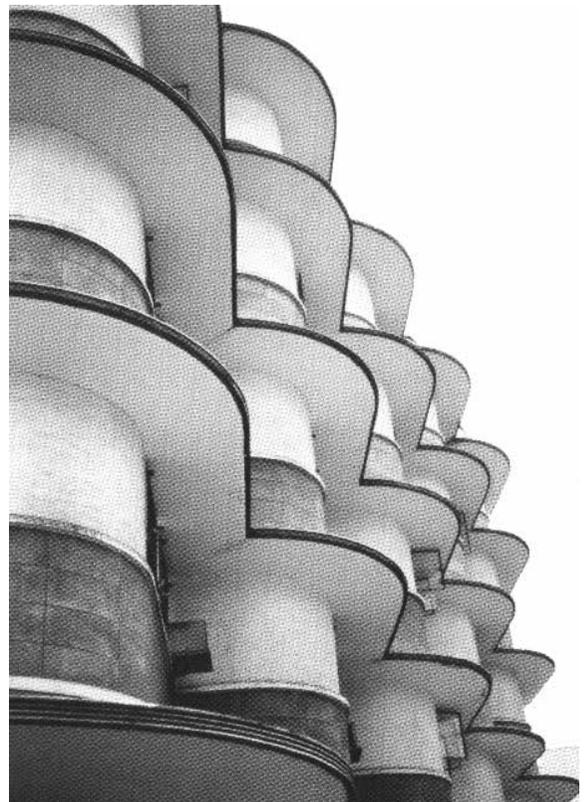


図8 1937年に建設されたナイロビのケンウッド住宅(Kenwood House)¹⁾



図9 ノイエ・ハイマート(Neue Heimat)のハンブルグの事務所(マイの設計) 1960年事務所の所在地: Hamburg Barmbek, Habichstraße 123-125¹⁾

苛酷な気象条件を科学的アプローチで取り組み解決を図った(図7、図8)。1944年にはドイツ人であるという理由で英国軍に逮捕され、南アフリカで軟禁された。釈放後ナイロビに渡り、カンパラやウガンダ諸都市の市街地整備計画や公共施設の建築設計を手掛けた。1951年にハノーバー工科大学から博士号を贈られている。1954年母国ドイツに戻り、ハンブルグで建築活動を再開した。ノイエ・ハイマート^{註12)}と呼ぶハンブルグに本拠を持つ住宅建設会社の運営に参加し、設計部長となる。かつハンブルグの同社本社ビルを設計している(図9)。ドイツ全国で第2次大戦により疲弊した建設技術を取り戻し、住宅復興の為大規模な住宅団地や都市拡張計画に従事した(図10)。しかし1957年には職を辞しダルムシュタット工科大学の教授に就任し、後進の指導に当たった。1967年にはソ連を初め東欧圏で進んだ工場生産されるコンクリートパネルを工事現場で組み立て、施工の合理化を図る工法を、西ベルリンのクロイツベルグで採用して老人ホームを建設している(図11)。



図10 ブレーメン(Bremen) ノイエ・ファール(Neue Vahr)の住宅団地、1961年¹⁾



図11 ベルリン市クロイツベルク(Kreuzberg)の老人ホーム、1967年¹⁾

おわりに

エルンスト・マイは建築学を英国、フランクフルト、ミュンヘン、ダルムシュタットで学習している。第一次大戦中はルーマニア、フランス、ソ連、ポーランドに滞在している。ヴァイマル共和国時代はシュレージエン、フランクフルトそしてアフリカで活躍している。そして戦争、大インフレ、大きな時代変化、住宅不足の中で、かつ

異なった社会・政治システムの中で自らの思想を貫いた。自分の思想を系統的に実現させた国際的な建築家と言える。活動の場はドイツ、ソ連、アフリカの3つの地域であり、そこに10万戸を超える住宅を建設した。アフリカでは英国のコロニアルルールで団地づくりを行った。戦後は母国ドイツに戻りジードルング(Siedlung)と呼ばれる大団地をライン・マイン地方、マインツ、ヴィースバーデン、ダルムシュタットに作った。エルンスト・マイは絵画が上手くあちこち移動して働くがその土地で多くのスケッチを残している。画家はアトリエに籠り、自分の思うように絵筆をふるうことが出来る。建築家は

その創作に発注者の意向が入る。エルンスト・マイやブルーノ・タウト、グロピウスは発注者である為政者と意見が合わない理由でドイツでの仕事をあきらめ海外に移り、自分の考えで仕事を行っている。

一方ナチスが支配していた時代にはそれに同調してナチス好みの建築を手がけたヴェルナー・マルヒのような建築家もいたのである。しかし、ヴェルナー・マルヒのように為政者にすり寄る行動が一般的であって建築家はその時代の権力者の意向により活動するのが生きやすかったのである。

〈註〉

1) フランクフルト・アム・マインはドイツヘッセン州の州都でドイツの中央銀行であるドイツ連邦銀行(ドイツ語: Deutsche Bundesbank, 通称ブンデスバンク)がある。これは連邦政府直属の法人である。そして間接的ではあるが行政機関にも位置づけられる。欧州中央銀行もこのフランクフルトにある(写真3)。したがってドイツの大銀行の本店



写真3 欧州中央銀行のシンボルマーク



写真4 現在のフランクフルト・アム・マイン中心部(大手銀行の本店が立ち並ぶ)

はフランクフルト・アム・マインにある。ロスチャイルド家(ドイツ語: ロートシルド家: Familie Rothschild)もフランクフルト・アム・マイン出身で世界の金融に影響を与えた。このような事からドイツの首都はベルリンであるが、フランクフルト・アム・マインはドイツの金融の中心地である(写真4)。ドイツにはフランクフルトと呼ぶ都市が二つある。一つがマイン河の畔のフランクフルト・アム・マイン、もう一つはオーデル河の畔のフランクフルト・アン・デル・オーデルで、これは旧東独の都市であった。オーデル河はドイツとポーランドの国境線となっている。

2) デュッセルドルフ出身のユダヤ系ドイツ人で有名人にハイリッヒ・ハイネ(Christian Johann Heinrich Heine, 1797~1856)がいる。エルンスト・マイの母親同様に資産家の家庭に生まれた。文学史的にはロマン派の流れに属するが、政治的動乱の時代を経験したことから、批評精神に裏打ちされた風刺詩や時事詩も多く発表している。平易な表現によって書かれたハイネの詩は、様々な作曲者から曲がつけられており、今日なお多くの人に親しまれている。最も有名なのは1838年にフリードリッヒ・ジルシャーによって作曲された「ローレライ」(写真5)であろう。わが国でも愛唱されている。ハイネはユダヤ教からプロテスタントに改宗しゲルマンと同化に努めたユダヤ人であったが、ナチスの時代にその著作は焚書の対象となった。



写真5 ライン河の難所ローレライ

- 3) Friedrich von Thirsch(1852~1921)は1868~1873の間シュトゥットガルト工科大学で建築学を学んだ。1882年にミュンヘン工科大学の教授に就任し、建築学の指導を行った。国王や貴族の為に住宅や建築物の設計を行った。1882年にはパウル・パロットと共にベルリンの帝国議会設計コンペで1位に入選している。ヴィースバーデンの温泉保養施設、ミュンヘンの法務省ビル、ライプツヒの帝国裁判所を設計した。作風はネオバロック調であったが、そこにモダニズムを取り入れた。建築設備に深い理解を示し、中央式暖房、中央式換気装置、エレベーター、衛生設備を積極的に取り入れ普及と進歩に貢献した。
- 4) Theodor Fischer(1862~1938)は1880~1885の間ミュンヘン工科大学で建築学を学んだ。ここでティールシュに師事した。1886年から1889年の間ベルリンの帝国議会設計コンペで1位に入選したパウル・パロットの設計事務所に勤務した。1893年から1901年の間ミュンヘン市の技師として、ミュンヘンの都市計画を行った。そして都市計画に関する法律造りに貢献した。1901年にシュトゥットガルト工科大学教授に招聘され、建築計画と都市計画を教授した。設計事務所も持ち、そこで、ブルーノ・タウトはフィッシャーに師事した。フィッシャーの弟子にはブルーノ・タウト、エルンスト・マイのほか、パウル・ボナツ(Paul Bonatz)、フーゴ・ヘーリング(Hugo Häring)、エーリッヒ・メンデルゾーン(Erich Mendelsohn)、ドミニクス・ベーム(Dominikus Böhm)ら錚々たる建築家が名を連ねている。フィッシャーの代表作にはカッセルのヘッセン州立博物館、ミュンヘン・パラーハのプロテスタント教会、シュトゥットガルトの芸術建物等がある。
- 5) 1907年にドイツで創立された、創造的作業と産業の協同により、産業活動の向上を目的にした連盟。わが国では従来「工作連盟」と訳されてきた。これでは小中学生が本立てなどを造る工作と間違えかねない。以前の住宅は貴族のものであった。一般労働者の住宅は非常に粗末なものであった。ドイツ革命以来一般労働者も健康な住宅に住めるようにといった社会主義者の運動もこのヴェルクブンドには含まれている。システムキッチン導入、住宅建設の規格化、建築工事におけるプレハブ化などを実施し、住宅建設が安価にできるように努力した。簡単に工作連盟と訳すべきではないと筆者は考える。英米の文献を見てもあえて翻訳せず、German Werkbundと書いている場合が殆どである。本稿では工作連盟という訳語を使用せず、ドイツヴェルクブンドとした。
- 6) Raymond Unwin(1863~1940)は英国を代表する都市計画画家で、勤労者階級の住宅の改善に努力した。氏の考え方は氏の著書“Town Planning in Practice”に述べられている。それまで公衆衛生の立場で設計されていた住宅をそれだけではなく、さらに魅力的にすることに傾注した。庭園を取り入れる”ガーデン・シティー”の考えを広めた。ロンドン北部のハムステッド・ガーデン・サバーブは氏の設計で緑が豊かで有名な住宅団地である。1915~1916年にかけて英国都市計画協会会長、1931~1933年英国王立建築家協会RIBA会長をつとめ、1932年にはナイトの爵位を得ている。晩年には米コロロンビア大学の教員も務めた。氏の父親は皮革製品製造の工場経営者であった。これはエルンスト・マイの父親も同業であり、エルンスト・マイがレイモンド・アンウインを私淑した一つの理由でもあろう。レイモンド・アンウインの業績について和書としては西山康雄著「アンウインの住宅地計画を読む」(彰国社、1992年)が詳しい。
- 7) オットー・マルヒはエルンスト・マイが師事しようとしたように社会主義的な側面を持つ建築家であった。ベルリンのパンカウ(Pankow)地区のブライト通りアマリエン公園の住宅があるが、これはオットー・マルヒの作品である。1896年から1897年にかけて建設されたが、当時のベルリンには珍しく、ガーデン・シティーの思想が取り入れられている。(Wohnanlage Amalienpark, Amalienpark1-8, Breitestraße2/2A)
- しかしその子息であるヴェルナー・マルヒ(Werner March、1894~1976)はナチス建築の代表者として有名になった。代表作は1936年ベルリンオリンピックで使用されたオリンピック競技場である(写真6)。ナチス政権を逃れ来日したブルーノ・タウトはこの作品に対しトルコへ出国する直前の1936年9月20日の日記に所感を述べている。「人間の知覚は、私たちが拡声器、望遠鏡、照明塔などのメカニズムを自由に活用するようになってから、著しくこの能力が高められた。この事実はまた、建築における新機軸でもある。これによって私たちの知覚は、人間の生具の感覚を遥かに超出する広大な範囲に達した。例えばベルリンのオリンピック競技場では、10万人もの群衆が同時に見、かつ聞くことができたのである。確かにマルヒは非常に勤勉な建築家だし、またその作品には雅致がある。しかし今度のオリンピック建築はこれから先き長い間、建築界に俗物的な観念を植え付けることになるかも知れない。要するに「頭脳」と芸術とが欠けているのだ。巨大な軸を持って競技場全体を貫き(これは軸に対する偏執にほかならない)、この軸を挟んで相対する塔を数か所立て、こうして会場を任意に区切っているが、その印象は射撃場そっくりである。」(篠田英雄訳)



写真6 ヴェルナー・マルヒ設計のベルリン市オリンピック競技場

- 8) ブレスラウ(Breslau)は旧シュレージエンの商工業都市でポーランド名はロツワフ(Wrocław)、シュレージエンは(Schlesien)第2次世界大戦後ドイツからポーランドに割譲された土地でポーランドの南部地方で、重工業地域である。ポーランド語ではSlask(シロンスク)。
- 9) フランクフルトにはユダヤ人ゲットー(Getto)があった。1462年から1796年までユダヤ人はユーデンガッセ(Judengasse)のゲットーに住むことを強いられた。ロスチャイルド家もこのゲットーに住み、ドイツ貴族に金を貸すことで、世界の金融界に進出した(写真7)。
- 10) 近代建築国際会議CIAM(Congrès International d' Architecture Moderne)は、近代建築と都市計画の理念の追求を目的として、ル・コルビュジエやジークフリート・ギーディオンらによって組織され、1928年スイスのラサラにて、ヨーロッパの28人の建築家が参加して発足した。その目的は「建築



写真7 フランクフルトのユダヤ人ゲッター(フランクフルトのユダヤ博物館)

および都市計画における社会的、科学的、倫理的および美学的概念と一致する環境の創造と、それによる人間の精神的、物質的要求の満足、またコミュニティの生活と統一された個性の発達、ならびに人間の活動と自然環境との間の調和の育成であった。CIAMは近代建築運動の核心的な組織となった。わが国にも影響を与え、上野伊三郎を中心に「日本インターナショナル建築会」が関西に設立された。ブルーノ・タウトはこの会の会長上野伊三郎の招きにより、ナチスを逃れて来日している。

- 11) 1927年にはシュトゥットガルトでドイツヴェルクブンドにより第一次世界大戦で疲弊したドイツの建設技術を一気に取り戻すべく大規模な住宅コンペが行われ、ヴァイセンホーフに有名建築家の住宅が建てられた。それまで住宅は貴族や金持ちの為に作られていたが、一般市民にも手が届く住宅づくりがドイツヴェルクブンドの主張であり、貴族の住宅を否定するポスターが作られた(写真8、9)。

写真8 貴族の住宅を否定し、一般市民に手が届く住宅を強調したドイツヴェルクブンドのポスター



写真9 ヴァイセンホーフジードルング(Weißenhofsiedlung)に建つル・コルビジェの作品

- 12) ノイエ・ハイマートはドイツ語で直訳すると「新しい故郷」となる。名前自体はナチスドイツの時代にさかのぼる。1933年5月に労働組合の住宅会社が経営不振に陥りドイツ労働戦線(DAF)の傘下に入った。1939年に社名をノイエ・ハイマートと変更した。ハンブルグが中心であったが、第二次世界大戦後英国の占領軍に押収された。そして住宅の復興、都市の復興にあたった。社長になったハインリッヒ・プレット(Heinrich Plett)は商才があり、事業を拡大し中小の住宅建設業者を買収するなどし、1950年末には10万戸の住宅を所有するようになった。住宅設計の権威者であったエルンスト・マイを設計部長に招いた。そしてドイツ全国に大規模住宅団地を展開していった。1963年にプレットが死去し、養子のアルバート・フィートル(Albert Vietor)が後任社長となったが、規模拡大の放漫経営で多額の損失を出し、その後は大規模団地は作られなくなった。

筆者の古くからの友人田中敏郎さん夫妻はノイエ・ハイマートがシュトゥットガルトの郊外アーズムバルト(Asemwald)に建てた巨大な集合住宅に1978年以来住んでおられる(写真10)。この集合住宅は1950年に計画に入り、1968年に設計が完了し、最初の入居は1971年4月12日であった。エルンスト・マイは1957年にノイエ・ハイマートを辞職しており、初期の段階で設計にかかわったかもしれないが詳細は不詳である。この住宅の設計者はオットー・イエーガー(Dr. Otto Jäger)とヴェルナー・ミュラー(Werner Müller)である。



写真10 シュトゥットガルトの郊外アーズムバルト(Asemwald)に建つノイエ・ハイマートの集合住宅

〈参考文献〉

1. Claudia Quiring, Wolfgang Voigt, Peter Cachola Schmal, Eckhard Herrel. "Ernst May 1886-1970" Prestel
2. 田中辰明・柚木玲「建築家ブルーノ・タウト—人とその時代、建築、工芸 オーム社
3. 田中辰明「「ブルーノ・タウト」・日本美を再発見した建築家」、中公新書2159
4. 田中辰明「ブルーノ・タウトと建築・芸術・社会」東海大学出版会
5. 田中辰明「パウハウス(ヴァイマール)」月刊建築仕上技術2014年8月号、工文社
6. 田中辰明「パウハウス(デッサウ)」月刊建築仕上技術2014年9月号、工文社
7. 田中辰明「パウハウス(ベルリン)」月刊建築仕上技術2014年10月号、工文社
8. 田中辰明「ナチス好みの建築」月刊建築仕上技術2014年11月号、工文社